

## 増田渉『魯迅伝』の校勘記

東 延欣

**要旨：**増田渉は1931年に魯迅の個人講義を受けた際に、魯迅との接触経験に基づいて、上海滞在中から『魯迅伝』を執筆し、1932年8月20日に完成した。本稿では、増田渉が著した『魯迅伝』の3つの版本の紹介をはじめ、手書き原稿（関西大学図書館所蔵）を底本として、出版された改訂本である改造版や岩波版との異同を検討する。

**キーワード：**増田渉、魯迅伝、原稿、版本比較

### はじめに

増田渉は1931年3月20日から、同年12月末までの10か月の間に、晩年の魯迅と出会って、魯迅から『朝花夕拾』、『野草』、『中国小説史略』、『呐喊』、『彷徨』について直接指導を受けた。その間、増田渉は魯迅との接触経験に基づいて、上海滞在中から『魯迅伝』を執筆し、1931年8月20日に初稿を完成した。増田は手書きの『魯迅伝』の原稿の添削を魯迅本人に依頼したことがある。増田渉は『魯迅の印象』の中で、「この原稿は一度、魯迅に見てもらったの…」と言及した。帰国後の増田渉と恩師である佐藤春夫はこの『魯迅伝』の掲載に奔走することとなった。<sup>1</sup>1932年2月、増田は編集の要求に応じて東京で原稿を圧縮して、1932年4月号の『改造』に掲載させた。<sup>2</sup>その後、『魯迅伝』は1935年に増田と佐藤春夫が共訳した『魯迅選集』の付録として、岩波書店から再度出版された。

1932年11月7日増田渉宛魯迅書簡には、「今日『改造』に出た広告をも拝見しましたが作者（魯迅自身）は非常にえらく書かれて居ります、これも、慨歎すべき事です。つまり、あなたの書いた『某君伝』（『魯迅伝』）は広告のつとめになりました…」とあったので、増田渉が書いた『魯迅伝』は『改造』雑誌の1932年4月号に掲載され、魯迅はずっと関心を持っており、出版した『魯迅伝』も読んであり、その中の内容を認めていたのだろう。増田渉が書いた『魯迅伝』は、最初に書かれた魯迅についての伝記であるのみならず、魯迅本人が校閲し、関心を持っていて希望を寄せた唯一の魯迅伝記である。よって、この『魯迅伝』は非常に貴重な資料で、魯迅に関する研究に価値があると認められる。<sup>3</sup>

<sup>1</sup> 勝山稔、「改造社版『魯迅全集』をめぐる井上紅梅の評価について」、東北大学中国語学文学論集、2011年11月30日

<sup>2</sup> 増田渉、『魯迅の印象』、角川書店、1970年220頁。

<sup>3</sup> 以上の『魯迅伝』の発表経緯の内容について、筆者は「以《魯迅伝》为中心的増田渉手稿研究——魯迅与光復会关系新考」（『亞洲与世界』、中国・社会科学文献出版社、2020年9月）、また、

## 一、各版本の紹介

金宏宇、杭泰斌（2017）によると、版本研究、いわゆる書誌学について3つの核心概念があり、それぞれは **edition**（版本）、**text**（原文）、**version**（改訂本）である。<sup>4</sup>**edition**（版本）とは、図書館学の概念に傾き、本の物質的な状態に注目する。**text**（原文）というのは文献学がよく使用する概念であり、本文の内容構成に関する特定の言語の重要な歴史、著作物の理解、文法のおよび修辭的、歴史的研究を指す。**version**（改訂本）は同一原文の幾つの変体であり、例えば作者が、表現したい意図を変更し、自分の作品を少し添削する場合である。<sup>5</sup>それは異なる伝播者の抄本、または異なる編集者、出版社から出版された版本は同じ原文を異なる版本にする可能性があるためである。一方、異なる版本は異なる原文となる可能性もある。一般的に、ある作品の版本の数量は原文より多い。作者の手書き原稿が存在する場合、原稿は原文であり、その後の原文は改訂本となる。すなわち、**edition**（版本）、**text**（原文）、**version**（改訂本）、この3つの概念が交わっている。本研究は、原文、いわゆる原稿と幾つかの改訂本との関係を主として検討する。

著者である増田渉は魯迅本人と直接の交流があり、魯迅の生前に魯迅本人の目を通して作成した世界で最も早い魯迅についての伝記であるため、研究の価値は極めて高いと考えられる。筆者の調べたところでは、増田が主体となって執筆し、日本で出版された『魯迅伝』には以下の3つの版本である。

- a、直筆原稿。1931年8月。（以下「原稿」）
- b、雑誌『改造』に掲載された版。1932年4月。（以下「改造版」）
- c、岩波文庫から出版された『魯迅選集』の付録版。1935年6月。（以下「岩波版」）

また、増田渉が執筆したこの『魯迅伝』は中国語に翻訳されたこともある。中国語訳本は以下の3つの訳本がある。

- a、『台湾文芸』に掲載された頑鉄訳本（1935年新年号）。
- b、上海当代書店、上海青年書店、上海文光書局から出版された『魯迅文学講話』（1936-1937年）、及び上海群衆雜誌公司、上海博覽書局から出版された『魯迅手冊』（1938年、1947年）に収録された梁成訳本。
- c、現代北京魯迅博物館魯迅研究室編集した『魯迅研究資料』に収録された卞立強訳本（1976年）

---

「増田渉版《魯迅傳》的中文訳本新考——以増田渉手稿為中心」（『信陽師範學院學報 哲学社会科学版』、2021年1月）、両方にも論述したので、ここで省略する。

<sup>4</sup> 金宏宇 杭泰斌、「中国现代文学版本研究的新路径」，华中师范大学学报(人文社会科学版)第56卷第3期，2017年5月。

<sup>5</sup> 蘇杰、『西方校勘学論著選』，上海人民出版社，2009年。

最初の増田渉が執筆した『魯迅伝』は、1931年に上海滞在中から魯迅の個人講義を受けた際の、増田の手書きの『魯迅伝』の原稿である。増田渉の歿後、蔵書の全部が、一切を生前就任していた関西大学の図書館に保存されることになった。<sup>6</sup>よって、この版本は関西大学図書館に所蔵されたものである。まずは、edition（版本）の角度から考察する。

この原稿である版本は便箋のような紙に書かれ、左上に手書きで頁番号が書かれており、全部で168頁がある。原稿によると、この版本の元のテーマは、『中華民国の前衛的巨人』であったが、このテーマは朱筆で削除され、隣に『魯迅傳』と訂正している。本文では、朱筆、鉛筆、または本文と同様な黒筆で訂正され、書き込まれている。『魯迅の印象』の中に、魯迅がこの原稿を校閲したという記載があるため、さらに筆跡から見ると、それらの訂正した跡は増田渉本人と魯迅の2人の筆跡だと判断できる。最後の168頁に、「一九三一、八、二十、上海にて」と書いており、この原稿の版本の作成した時期や場所は明らかにわかる。

その次は、雑誌『改造』の1932年4月号に掲載された版本である。この版本のテーマは『魯迅傳』となっている。この版本は魯迅本人が校閲し、増田渉と佐藤春夫はこの『魯迅伝』の掲載のために奔走することとなっており、なかなか順調に進めなかった。掲載された前の1932年2月、増田は編集の要求に応じて東京でこの原稿を圧縮したことがあるため、この版本は原稿より内容が大量に削除された。また、改造版の『魯迅伝』中に、×のマークで表示している伏せ字のある言葉や文章がたくさん存在している。

3番目の版本は同様に『魯迅傳』をテーマとして、1935年に増田渉と佐藤春夫が共訳した『魯迅選集』に付録し、岩波書店から再度出版されたものである。この版本は雑誌『改造』に載せてある内容に基づいて、またいろいろ削除されたため、3つの版本の中で最も内容が少ないのだと考えられる。また、『改造』版の『魯迅伝』中に伏せ字のある言葉や文章が復元されたところも何箇所もある。文章の最後で、「一九三一、八月上海にて起稿、一九三二、二月東京にて改稿。同年四月号『改造』に登載。」と、原稿及び改造版のことが言及されている。

## 二、校勘成果

本稿は、以上述べた増田渉の手書き原稿を原文として、出版された改訂本である改造版や岩波版との異同を検討する。最終的な詳しい校勘の結果はけっこう量があるので、本稿では幾つか例を挙げて成果として反映する。<sup>7</sup>

<sup>6</sup> 肥田皓三、関西大学図書館報『籍苑』（第20号）、1985年4月28日。

<sup>7</sup> この校勘表は最初から陳維氏がやっており、途中まで筆者が引き続いて完成したものである。

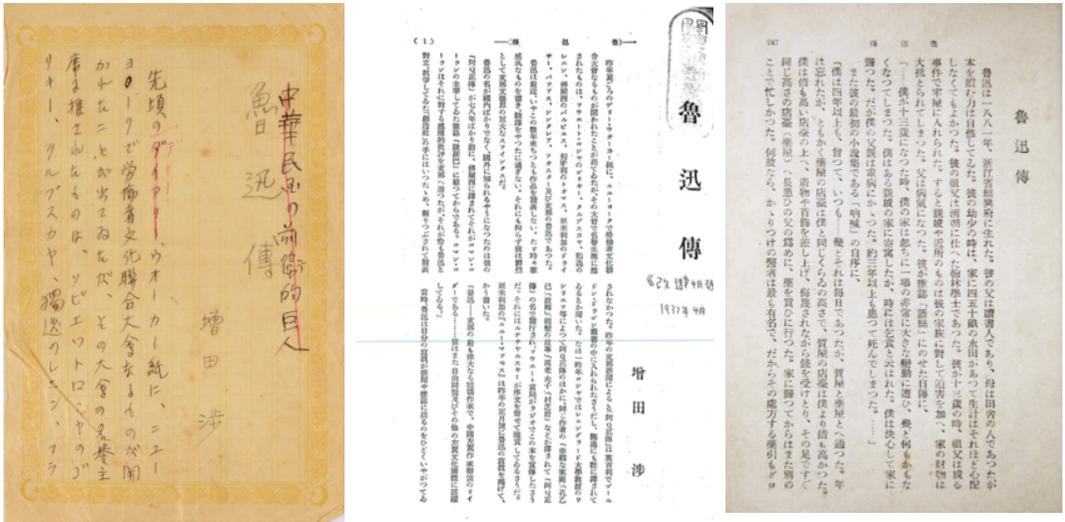


図1：『魯迅伝』各版本

以上の3つの版本の校勘活動を通じて、改造版の『魯迅伝』は原稿と比較すると、異同のある箇所は400以上ある。岩波版は改造版に基づいて添削して再版されたため、内容はほぼ同じで、たった10箇所未満の異同が存在している。改造版の『魯迅伝』は原稿と異同のある箇所は、言葉遣いの完善、仮名と漢字の変換などのような全体の差し障りにならない部分もあり、類義語での置き換え、内容上の大幅な添削などの部分もある。改造版は他の2つの版本と比較すると、最も注目される異同のある箇所は、×のマークで表示している伏せ字のある言葉や文章がある。また、岩波版の『魯迅選集』に収録された『魯迅伝』の中には、それらの言葉や文章が復元されたところもある。本論は校勘によって、文章の表現上や内容上の両方から分析し、各状況について例をあげる。

ただし、ノート字体は崩し字が多く、原稿が経年劣化しており、筆跡が不鮮明になっているため、非常に難読である。筆者は『魯迅伝』の校勘作業にできる限り力を尽くしていたが、解明されない箇所は幾つか依然として存在している。故に、これからも解読作業に対する努力しながら、専門家たちの意見や協力も必要なのだと考えている。

1、表現上の異同：

校勘によって、『魯迅伝』の各版本の表現上の異同は主に以下の3つの状況に分類される。

(一) 言葉遣い

言葉遣いの異同、いわゆる同じ意味の言葉を異なる言い方で表現する。校勘によると、1つ目の状況は、改造版と岩波版の言葉遣いは同一で、原稿のみ異なる言葉遣いが使用されている。

表 1

	原稿		改造版		岩波版
P20	長病	P4	長患ひ	P248	長患ひ
P21	学費のいらぬ学校	P4	学費のかからぬ学校	P248	学費のかからぬ学校
P30	満ちてゐた	P5	横溢してゐた	P249	横溢してゐた
P94	けれども	P15	然し	P266	然し

表 1 の例から見ると、原稿の「学費のいらぬ学校」「けれども」は改造版及び岩波版と同じ意味の書面言葉に置換えしている。原稿の「長病」「満ちてゐた」のような言葉は、他の 2 つの版本で同義語に置換えしている場合も幾つかある。

もう 1 つの状況は、3 つの版本は同じ意味のそれぞれ異なる言葉遣いを使用している。（表 2）

表 2

	原稿		改造版		岩波版
P51	丁度その頃、	P7	その時、	P253	丁度その時、

## （二） 固有名詞の表現

固有名詞の表現の場合は、全ては以下の表の例のように、改造版と岩波版は同様に原稿にある言葉を換言している。

表 3

	原稿		改造版		岩波版
P31	西洋醫蘭学	P5	西洋医学	P249	西洋医学
P34	微生物学	P5	細菌学	P250	細菌学
P35	映画活動写真	P5	映画	P250	映画
P48	銭屋	P7	両替屋	P252	両替屋
P77	「一件の小事」	P12	「一つの小事件」	P262	「一つの小事件」

以上の例の中で、少し特別なのは原稿の 31 頁の「西洋醫蘭学」や 35 頁の「映画活動写真」であり、両方とも訂正された跡があり、改造版と岩波版の両方とも訂正される前の「西洋医学」や「映画」を使用してある。

「蘭学」という言葉が現れる原文は、「で彼（魯迅）は、日本維新と蘭学との関係に気づき、長い、腐った伝統によって縛られている支那国民の精神は、科学的知識によって、まづ医学と医術とによって啓蒙することが、支那の国民的自覚を呼び醒すことの第一要件だと考へたのだ。」とある。蘭学は、江戸時代にオランダを通じて日本に入ってきたヨーロッパの学術・

文化・技術の総称である。<sup>8</sup>但し解剖学、医学に関する学科は、当時のプロシア（ドイツ）の書物がオランダ語に訳されてから、日本への広く伝播されたことになった。ここの文脈によって、魯迅が医学を勉強することを決心した原因を述べており、オランダ独自のもの「蘭学」というわけではなく、「西洋医学」を使用した方が読者にとって理解しやすいため、出版物である改造版や岩波版では「西洋医学」に訂正したと考えられる。

また、原稿版に「映画」が現れる箇所は、魯迅が1922年に書いた「呐喊」の序文の翻訳であり、「呐喊」の序文の中国語の原文は、「我已不知道教授微生物学的方法，现在又有了怎样的进步了，总之那时是用了电影，来显示微生物的形状的，因此有时讲义的一段落已完，而时间还没有到，教师便映些风景或时事的画片给学生看，以用去这多余的光阴。」とある。魯迅はここで、「映画」と同じ意味である「電影」を使っている。英語の film 或いは cinema に対応する「電影」という言葉は1898年、孫熹聖が初めて用いた。<sup>9</sup>よって、魯迅が「呐喊」の序文を書いた際に、既に「電影」という言葉が存在していたため、ここの「電影」というのは film 或いは cinema の意味だと認められる。「活動写真」(motion picture) とは明治、大正期における映画の呼称である。<sup>10</sup>本来は幻灯機のことを指し、大正後期になってから意味が「映画」を指すようになり、1935年頃以降、次第に使われなくなった。<sup>11</sup>

以上の言葉の由来の説明を関連させて考えてみると、「電影」の意味により近づく日本語は、古い言い方である「活動写真」より「映画」の方が出版物に相応しいと考えられる。

そして、以上の固有名詞のほか、国名の表現について、3つの版本の中には片仮名や漢字の区別が存在している。

表4

	原稿		改造版		岩波版
P1	フランス	P1	佛蘭西		削除
	ハンガリー		匈牙利		
P2	アメリカ		亜米利加		
P3	エギリス		英吉利		
	ドイツ		独逸		

<sup>8</sup> 全国歴史教育研究協議会編、『日本史用語集』，山川出版社16刷，1998年（1刷1995年）153頁

<sup>9</sup> 李銘、「電影一詞的由来」，現代電影芸術，2015年53-58頁

原文：作為一種藝術形式，與英語 film 或 cinema 對應的“電影”一詞，是孫熹聖先生在1898年提出的。“電影”一詞於1946年報聯合國科教文組織備案，定為與英語 film 和漢語 cinema 對應的漢語詞彙。

<sup>10</sup> ダグロン原著、柳河楊江訳述、柳川春三訳、『写真鏡図説』（1867年）によると、日本語では、「映画」という語の本来の意味は「画を映すこと」あるいはそうして「映された画」ということである。そのため、近世末期においては写真と同義に用いられていた。

<sup>11</sup> 日本語国語大辞典（精選版）、小学館，2005年。

雑誌「エフロパ」	雑誌「歐羅巴」		
----------	---------	--	--

表4の内容は岩波版で削除されたため、原稿や改造版の2つ版本を比較すると、原稿は片仮名で、改造版は漢字で国名を表示している。

また、表5のように、原稿は漢字、改造版や岩波版は片仮名の場合も1箇所ある。

表5

	原稿		改造版		岩波版
P56	希臘	P7	ギリシャ	P254	ギリシャ

### （三）改造版の伏字

伏字とは、「公刊の印刷物で、明白な表現を避けて、その部分を文字の代りに空白や○や×で表現することをいうことであり、近代日本ジャーナリズム誕生と同時に始まる。明治政府はその成立と同時に言論、報道の官僚的弾圧を開始した。」<sup>12</sup>である。いわゆる言論統制であり、発禁を中心とする各種取締法<sup>13</sup>の制定である。新聞紙法<sup>14</sup>の施行という、出版法とあわせ、検閲をはじめ、管理や統制が強化されていった。また、第二次世界大戦以前の日本では治安維持法の下で、さらに思想統制<sup>15</sup>が行われていた。この体制下、当時の作家、翻訳者、編集者などが自分作品を発表でき、自分の言論の自由性を確保するため、伏せ字を用いていた。1949年（昭和24年）5月24日、「出版法及び新聞紙法を廃止する法律」（昭和24年5月24日法律第95号）で正式に廃止された。

改造版の中で、伏字のある言葉や文章は22箇所が存在している。関西大学図書館所蔵の増田渉の手書き『魯迅伝』原稿版を参考に、仮に改造版と岩波版両方に書かれていない言葉や文章が未公開の原稿の中に存在すれば、不明なところを明らかにすることができるだろう。校勘によって、この22箇所の伏字を以下の5つの状況に分類される。

a、改造版には伏字で表示している箇所に対応する部分は、原稿と岩波版には同じ表現で存在している。

<sup>12</sup> 世界大百科事典、平凡社（電子版）。

<sup>13</sup> 1869年（明治2）に新聞紙印行条例、ついで讒謗律（1875）を経て、出版法（1893）、新聞紙法（1909）など、時を追って体系化した。

<sup>14</sup> 全文45条と付則からなり、時事を報ずる新聞の保証金納付義務（12条）、予審内容の掲載禁止（19条）、犯罪を煽動もしくは曲庇する記事の禁止（21条）、安寧秩序を紊または風俗を害すると認む新聞の発売・頒布の禁止（23条）と発行人・編集人の処罰（41条）、陸軍・海軍・外務各大臣の軍事・外交に関する事項の掲載禁止、記事制限権（27条）などが規定され、違反には重い刑罰が科せられることになっていた。

<sup>15</sup> 思想書やプロレタリア文学のみならず、一般の小説等でも「社会主義」、「共産主義」、「無政府主義」といった語句は検閲を免れるために伏字とされることが多かった。

表 6

	原稿		改造版		岩波版
P37	鑑賞	P6	××	P251	鑑賞
P57	暴虐	P8	××	P254	暴虐
P154	統治者を恐怖させ、	P20	×××を××させ、	P275	統治者を恐怖させ、
	無産階級革命文学に対 抗する		××××××文学に対 抗する		無産階級革命文学に対 抗する

この場合は疑問なく、改造版の伏字が復元される。

b、改造版には伏字で表示している箇所に対応する部分は、原稿や岩波版に存在しているが、表現はそれぞれ異なる。

表 7

	原稿		改造版		岩波版
P38	無意味な見せしめの材 料と看客とになるより ほかに能がない。	P6	無意味な×××××× ××××とになるより ほかに能がない。	P251	無意味な見せしめの材 料と見物人となるよ りほかに能がない。
P87	軍閥政府に対して、プ ロレタリア革命の前提 として先づブルジョア 革命を完成させようと いふ計画であった。	P14	封建軍閥を倒し、×× ×××××××××× ×××先づ民族革命を 完成させようと考へた のだ。	P265	封建軍閥を倒し、無産 階級革命の前提とし て、先づ民族革命を完 成させようと考へたも のらしい。

この場合は改造版の伏字の文字数を考える必要がある。以上の2箇所とも原稿の方と対応するところの文字数と一致している。よって、この2箇所の元の内容は岩波版と表現が違い、復元すれば、原稿の内容が正しい。

c、改造版には伏字で表示しており、原稿に対応する内容があるが、岩波版では削除された。

表 8

	原稿		改造版		岩波版
P47	武昌に革命軍が起きると、腐り きつてゐた清廷はあまりに脆く 潰滅した。	P7	武昌に革命軍が起きると、×× ×××××清廷はあまりに脆く 潰滅した。		削除
P155	我等のこの幾人の同志は已に暗 殺された。このことは無論、無	P20	我等のこの幾人の同志は已に暗 殺された。このことは無論、×		削除

<p>産階級革命文学の若干の損失であり、我等の甚だ大なる悲痛である。だが無産階級革命文学は却っていよいよ成長する、何故ならこれは革命の広大なる労苦群集に属するのだから、大衆が一日存在し、一日強大になれば、無産階級革命文学も共に一日一日と成長する、我等の同志の血は已に無産階級革命文学と革命的労苦大衆とはみな一様に壓迫され、一様に残殺され、一様に戦闘し、一様の運命にあって、革命的労苦大衆の文学であることを証明した。</p>	<p>×××××文学の若干の損失であり、我等の甚だ大なる悲痛である。だが×××××文学は却っていよいよ成長する、何故ならこれは××の広大なる労苦群集に属するのだから、大衆が一日存在し、一日強大になれば、×××××文学も共に一日は一日と成長する、我等の同志の血は已に×××××文学と×××××労苦大衆とはみな一様に壓迫され、一様に残殺され、一様に戦闘し、一様の運命にあって、×××××労苦大衆の文学であることを証明した。</p>	
---	---	--

筆者の考察によって、改造版と岩波版両方に書かれていない言葉や文章は上表のように2箇所があり、改造版の伏字のある箇所は明らかになった。

d、改造版には伏字で表示しており、岩波版に対応する内容があるが、原稿には存在していない。

表9

原稿		改造版		岩波版
なし	P13	成程魯迅の作品にはコムニズム的なプロレタリア××性はない。	P264	成程魯迅の作品にはコムニズム的なプロレタリア革命性はない。
	P19	秘密に××された。	P274	秘密に虐殺された。
	P20	支那×××××××の文学戦線を擁護し、	P274	支那無産階級革命の文学戦線を擁護し、

原稿が存在しないため、伏字の×マークの文字数を考えながら、以上の2箇所は岩波版の通りに復元しても問題ないと考えられる。

e、改造版には伏字で表示している箇所は、原稿や岩波版両方とも存在していない。

表10

原稿		改造版		岩波版



## (二) 原稿にあり、改造版や岩波版両方とも同じ内容で添削

表 12

	原稿		改造版		岩波版
P91	<p>学生の中には（魯迅の教へるの北京女子師範大学の学生も）段祺瑞の衛兵に発砲され、殺されるものが出て来た。急進教授は追い回された。その時、魯迅は北京公使館区域や外人経堂の病院や工場へ（そこは支那政府の警察権が及ばなかった）転々と逃げ回り、水ばかりで飢餓を凌いだ日が多かった。少し逮捕の手がゆるみさうだと彼は家庭へ立ち寄り、またきびしくなると逃げた。支那唯一の英文の達者といわれる林玉堂がチャイナ、クリテイクに魯迅のことを書いたが（李何林の編した『魯迅論』の中にその支那語訳がある）その頃、林玉堂は魯迅に會って「どうするつもりだ、これから」ときくと「でくのぼうになるんだ。」と答えた。だが、彼はでくのぼうになれなかった、彼は迫はれて逃げながらも、新聞に雑誌に、しきりに政府攻撃の文章を投じて、頑強に戦ってゐる。</p>	P15	<p>学生の中には軍閥政府の衛兵に発砲され、殺されるものが出て来た。急進教授には逮捕令が下された。その時、魯迅は北京公使館区域や外人経営の病院や工場へ転々と逃げ回り、水ばかりで飢餓を凌がねばならぬ日がつづいた。彼は逃げ回りながらも、新聞に雑誌に、頻りに政府を痛罵する文章を投じて、頑強に戦った。</p>	P266	<p>学生の中には軍閥政府の衛兵に発砲され、殺されるものが出て来た。急進教授には逮捕令が下された。その時、魯迅は北京公使館区域や外人経営の病院や工場へ転々と逃げ回り、水ばかりで飢餓を凌がねばならぬ日がつづいた。彼は逃げ回りながらも、新聞に雑誌に、頻りに政府を痛罵する文章を投じて、頑強に戦った。</p>

## (三) 原稿や改造版にあり、岩波版のみ削除

表 13

	原稿		改造版		岩波版
P1～P14	<p>先頃のダイアリー・ウォーカー紙に……こいつが</p>	P1～P3	<p>昨年夏ごろのデリー・ウォーカー紙に……こ</p>		<p>削除</p>

	胃袋に大へん悪かったん ですね		いつが胃袋に大へん悪 かったんですね		
--	--------------------	--	-----------------------	--	--

(四) 改造版や岩波版にあり、原稿には存在していない

表 14

	原稿		改造版		岩波版
P67	なし	P10	勿論、従来 of 古文家はこれに反対し、種々なる方法を以って、……然し実際白話文の勝れたる作品を示してこの運動の絶対的勝利を社会に贏ち得たものは魯迅の功と云ふべきだ。	P258	勿論、従来 of 古文家はこれに反対し、種々なる方法を以って、……然し実際白話文の勝れたる作品を示してこの運動の絶対的勝利を社会に贏ち得たものは魯迅の功と云ふべきだ。

### 三、小結

本稿は、本論では、増田渉が書いた『魯迅伝』の概要を説明し、また、関西大学図書館所蔵の増田渉の原稿を紹介した上、『魯迅伝』の3つの版本の校勘成果を提示していた。そして、増田渉の手書き原稿を底本として、出版された改訂本である改造版や岩波版との異同を表現上と内容上、2つの方面から考察した。以上の考察によって、『魯迅伝』表現上の異同は当時の出版界の状況を反映できる。出版された版本の言葉遣いは原稿よりさらに書面用語の使用率が高くなり、固有名詞の使い方が時代性を反映している。また、校勘によると、改造版の伏字のある言葉を復元される箇所が幾つかある。

ただし、現時点では解明されない問題は存在している。例えば、内容上の異同について、出改造版と岩波版は原稿を基づいて大幅に削除されたため、増田渉はどのような内容を削除したのか、こうして添削した原因は何だろうか、その点についてはこれからの研究にて詳しく論述するつもりである。

現在、まだ調査されていない魯迅及び魯迅作品に関する研究資料がたくさんある。本稿は『魯迅伝』の原稿資料を整理し、3つの版本の異同をよりわかりやすくなっているだろう。これからの研究活動で、以上の校勘記を運用すれば、魯迅関連する研究は新たな発展と突破がある、と筆者が信じている。